

研究実践論文

「経済的視点から考える信長の天下統一事業」の実践を通じた思考力・判断力・表現力を育む授業開発

渡 辺 研 悟

1. はじめに

平成25年度より高等学校の新学習指導要領が全面実施され、高等学校教育は新たな指針のもとでの実践が始まった。今般の「改訂の基本方針」のひとつとして掲げられたのが、「知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視すること」である。

しかし、現状の課題として、高等学校における思考力・判断力・表現力を育む授業開発の提案が少ないことが挙げられる。土屋武志、下山忍が編集を行った『日本史授業デザイン 思考力・判断力・表現力の育て方』（明治図書・2011年）など、高等学校での授業実践を紹介しているものはあるが、そうした実践がどの理論を参考に、どの授業モデルを組入れて開発をしたのかの提示がない。

また、そもそも実践事例の蓄積が少ないことも課題である。論文検索サイト「CiNii」で「思考 判断 表現 高等学校」と検索をした場合、検索件数は36件に過ぎず、「地理歴史」を含むものは2件であった。その中には小原友行らの論文「高等学校社会系教科における批判的思考力を育成する授業開発の研究（Ⅲ）：公民科現代社会小単元「日銀の金融政策」の場合」（2014）があるが、その他に高等学校社会科で思考力・判断力・表現力を育む実践事例は見当たらなかった。思考力・判断力・表現力を育む授業が求められている中、更に多くに実践を蓄積していくことが求められると考えた。

2. 研究の目的と方法

（1）研究の目的

本研究の目的は、高等学校における、習得した知識や資料を活用し、生徒が主体となる歴史の授業を開発すること、そして授業を通じて生徒の思考力・判断力・表現力を高めることである。授業開発では、先行研究を批判的に踏まえ、思考力・判断力・表現力を育む授業と、その開発のための知見を提示する。なお、本研究における、思考力・判断力・表現力については、習得した知識を自身で使用するまでを含んだ包括的概念として捉える。

(2) 研究の方法

授業開発のための理論として、小原友行（2011）の「授業モデルにおける6つの型」、田中博之（2011）の活用学習を先行研究として取り入れた。

授業テーマは、織田信長の経済政策に注目させながら、信長の天下統一事業を考えるものである。愛知県総合教育センターの調査によると、歴史科目は地理・公民に比べて、思考力・判断力を育む授業の実践が困難と考えている教員が多い。そこで、歴史科目でも具体的なヒト・モノ・カネといった経済的視点を取り入れることで、因果関係をつかみやすくし思考力・判断力を育む授業ができると考えた。

本研究の成果の検証のためのデータは、①感想文、②レポート、③授業評価アンケート、の三つである。①感想文は授業中に、②レポートは授業後に行い、思考・判断・表現の力が育まれているかを検証した。③授業評価アンケートは授業後に、本実践の成果を図る指標として行った。

目指したのは理論を活用し、資料を基に考え、自らの言葉で学んだことを表現できる授業の開発である。授業開発から学習過程における記録と評価を整理し、授業開発に関する成果と課題を示す。

3. 先行研究の概観

授業開発における理論面の先行研究として、小原の提唱する授業モデルにおける6つの型、田中博之が提唱する活用学習を取り上げる。小原の理論は授業開発の段階で、発問の種類を4つに分け、さらに発問毎に授業を6つの型に分けるものである¹。田中の理論は、「思考や表現の型」を用いながら、生徒が個性を発揮して表現することを目指すものである²。

(1) 授業モデルにおける6つの型

小原は思考力・判断力・表現力を育む授業開発の形式として、「中学校歴史学習の授業モデルにおける6つの型」を提唱している。授業モデルを6つに分けるために、先ず歴史学習の発問を以下の4つに分ける。①事象の具体的有り様に関する問い（どのような出来事か）、②事象の原因や意味に関する問い（なぜ起きたのか）、③事象の関連性や展開に関する問い（なぜそうなったのか、どうなっていくのか）、④事象に対し主体的な意味づけを行う問い（それはよかったのか、どうすべきだったか）。小原は①については「資料から必要な情報を集めて読み取る」問いであるとし、②③④の間を解決する授業を「理解型」「説明型」「問題解決型」「意思決定型」「社会形成型」「社会参加型」とする。これが授業モデルにおける6つの型である。

実践のテーマ「織田信長の天下統一事業」は、上記の分類では「説明型」となる。小原によれば「説明型」の学習過程は次のようになる。

ア 問題把握…「なぜ、どうして」

イ 仮説の設定…「AだからBである」

ウ 仮説の理論的帰結の推論…「もし仮説が正しければ、～のようなことが起こっているはずである」

エ 資料の収集・分析…「本当にそんなことが起こっているのだろうか」

オ 仮説の検証…資料に基づいて仮説を検証

授業全体の構成を考える際、こうした学習過程は参考になる。問題はア～オのような学習過程を踏まえたとしても、教師がどのようにすれば問題を設定できるのか、生徒がどのようにすれば仮説を立てたり、主体的な表現活動ができるのかである。

(2) 活用学習

そこで、授業開発の手立てとして、田中が提唱する活用学習の理論を応用する。活用学習とは思考力・判断力・表現力を身につけるために、「子どもが思考や表現の型を活用して、活用問題を解決した結果を個性的に表現する問題解決的な教科学習」³である。田中は活用学習が備えるべき条件として7つの条件をかかげる。

[活用学習7つの条件]

条件① 活用学習の解決のために、どのような既習の知識・技能を活用すればよいかについて子ども達に意識化させる。

条件② 問題解決のプロセスを見通して思考や表現の段取りを考えさせる。

条件③ 話型・文型・表現型など、考えたり表現したりするための手本や補助輪となるモデルを教えて、それを個性的に活用させる。

条件④ 複数の資料を比較して問題の解決や主題の表現をさせる

条件⑤ 友達と異なる思考結果や創作内容を比較検証させる

条件⑥ 活用する型の項目例は「活用辞典」として小冊子にまとめたりカルタで整理して常時掲示したりしていつでも意識化できるようにしておく。

条件⑦ 自分に活用力がついたかどうかを自己評価させて次の活用学習につなげる。

話型や文型といった「思考や表現の型」は考えるためのフレームワークを生徒に提示し、思考や表現活動を補助するものであるが、それは全員が同じ思考、表現をするためのものではない。型を活用することで、学力と質を保障しつつ、個性的な表現の土台を提供するのである。

小原の授業モデルを田中の活用学習に再構成した本実践の授業展開は以下のようになる。

ア 活用問題の把握…「なぜ、どうして」

イ 資料の提示…資料から仮説を導く

ウ 思考や表現の型の提示…思考や表現の補助線を提示する

エ 仮説の設定…「AだからBである」

オ 仮説の表現…仮説を示し周囲と比較検討する

カ 仮説の検証…「本当に仮説は正しいのか」について検証

キ 表現活動に対する評価

付け加えておくと、「活用問題」とは、生徒の思考力・判断力・表現力を育むことができる発問の

ことだが、田中は活用問題の特徴として10の条件を挙げている(2011)。

4. 授業開発の実際

授業開発は、①活用課題の設定(単元全体をつらぬく大きなテーマ)。②活用問題の設定(学習課題解決のための思考力・判断力・表現力の発揮をともなう発問)。③習得内容の整理(学習課題・活用問題を考えるために生徒が習得すべき知識の整理)の三つを考えるとところから始まる。

(1) 活用課題の設定

活用課題とは、授業の方向付けを行う大きな問いである。本研究では小原の理論を参考にし、「織田信長の天下統一事業」を経済的観点から考える「説明型」の活用課題を設定した。なお、活用課題が思考力・判断力・表現力を育む問いとして相応しいかは、西岡の「本質的な問」の考え方を取り入れた⁴。信長の天下統一事業は、武力だけでなく経済政策があつてこそ実現可能であつた。経済政策は軍事面や生活面など様々な事象に結び付く。それゆえ、本授業で得られる経済への考察は、単元を超えて活用できる知識であり、活用課題として相応しいと判断した。

(2) 活用問題の設定

活用問題とは習得した知識を活用して、生徒が思考し答えを出す問題であり、活用学習の核として授業の質を決めるものである。活用課題「織田信長の天下統一事業」の考察にあたり、以下の活用問題を設定した。

活用問題① 信長の経済政策を商業・金融(財政)・貿易・貨幣の四つの視点から考えて説明する(なぜ信長は強大な軍事力を保持できたのか)

活用問題② 信長の五つ目の経済政策が何かを考えて説明する(なぜ信長は物流を重視したのか)

活用問題③ 信長の物流戦略を踏まえて各都市の役割を考えて説明する(どうして信長は各都市に影響下に置いたのか)

信長は機動的で強大な軍事力を駆使し、天下統一事業を進めたと歴史の教科書には記載されている。その軍事力を支えた経済政策について着目させる活用問題を設定した。

信長は支配圏拡大のため、狭い割拠的な地域経済を打破して商品流通圏の拡大を図った政治家であつた。池上裕子は「信長は伊勢湾・太平洋沿岸、瀬戸内海、日本海の三つの物流の大動脈の掌握を早くから視野に入れて動いていたのである。もちろんそれには全国平定を視野に入れた戦略上の役割もあつた。戦争になれば、軍事物資の調達・輸送、兵員の輸送に大いに役立つばかりではなく、敵国の船の入港を止めたり、物資輸送を禁じたりできる。ただしそれは戦時の限定的措置で、基本的には物流を促すのが信長の政策であつた」⁵と信長の物流に対する政策の重要性を指摘している。また、脇田修も「流通体制に注意をはらった信長であるから、軍隊の移動などの便をはかつて、交通網を整備した。」⁶と述べ、物流を重視した信長像を提示している。

活用問題①では、信長の経済政策として教科書に記述のある、楽市楽座、都市への課税、南蛮貿易、鉱山掌握、撰銭令を、それぞれ商業・金融（財政）・貿易・貨幣という切り口に分け、資料を基に考察させた。活用問題②では信長が物流を重視し、経済成長を図っていった事実を様々な資料をもとに理解させ、活用問題③では「三つの物流の大動脈」の具体的な物流拠点について考察させた。

3つの活用問題は生徒が仮説を立て、それを検証していく「説明型」授業である。こうした問いを通じて、生徒は「織田信長の天下統一事業」を考察できるようになる。

（3）活用課題・活用問題を考えるための知識の整理

生徒が活用課題や活用問題を解決するためには、どのような知識を予め習得しておくべきかを授業者が整理しておくことが望ましい。そのための整理のツールとしてロジックツリーを用いた。

図表1 ロジックツリーの一例



知識を整理することのメリットは、①習得学習の段階で教えるべき知識の抜け漏れを防ぐことができる。②表現活動の際に、生徒がどの知識を活用したかが視覚的にわかること、である。

活用学習の条件①は生徒が活用する知識を意識化することであるが、ロジックツリーを使うことで、活用するための知識を整理することができる。図表1は、信長の商業政策を理解するために必要な知識を整理したものである。

5. 授業展開の実際

活用問題①は、長篠の合戦を例に、信長が高価な鉄砲を大量に購入できた背景を考える内容である。活用問題②は物流について生徒がその重要性を自ら発見できる授業を展開した。活用問題③は物流戦略について、個別的事例をより深く考察し、物流の意義について考えることを目指した。

（1）活用問題①の授業展開

活用問題の展開は、資料の提示、思考の型の提示、表現と検証といったプロセスで進む。

展開① 資料の提示

活用学習の条件には複数の資料の比較があるが、今回は、商業・金融（財政）・貿易・貨幣の四つの視点で資料を提示した。（資料は一次史料のみならず、図表やマンガ、学術書などから引用しているため、ここでは「資料」とする。マンガ等を使用するのは学術的な内容でも生徒が分かりやすく受

図表2 単元計画

時間	学習内容	学習活動	学習形態
一 日 目	[1] 織田信長の基礎知識 [2] 活用問題① 「信長の経済政策を商業・金融・貿易・貨幣の四つの視点から考える」 [3] 活用問題② 「信長が重視した五つ目の経済政策が何かを考える」 [4] 学習内容のまとめ	・「長篠の合戦」から見る織田信長の経済力 ・資料を基にして信長の行った経済政策の内容と意義を考察し発表する。 ・資料を基にして信長の物流戦略を考察し発表する。 ・100字程度の感想を記入	・講義形式 ・グループ学習 （発表方法はホワイトボード） ・グループ学習 （発表方法は板書） ・個人作業
二 日 目	[1] 信長の物流戦略の具体例 [2] 活用問題③ 「信長の物流戦略を考える」 ：物流の要衝の役割について考察し、大白地図の作成を行う [3] 活用課題 「織田信長の天下統一事業を経済政策から考える」	・「堺」を例にとって信長の物流戦略のねらいを知る ・示された7つの要衝から2つを選び、資料を基にして、その意義を考察する。 ・グループで考察した内容をカードにまとめ、大白地図に示された要衝ごとにカードを貼り付け発表する。 ・織田信長の経済政策について400字の小論文を書く	・講義形式 ・グループ学習 ・白地図は一枚 ・班毎の考察内容を持ち寄り、ひとつの成果物を作成する ・個人作業（宿題）

けとれるためである）資料は視点ごと封筒に封入し、生徒は関心のある視点をひとつ選び、信長の経済政策について仮説を立てた。以下は各封筒に封入した資料の出典。

[商業]

- 1 楽市楽座について…『コミック戦国大名 織田信長の経済学』勁文社 1999年 小和田哲男
- 2 楽市楽座について…『ビジュアル版 逆説の日本史四 信長全史』小学館 2011年 井沢元彦
- 3 楽市楽座令…『信長公記』（『新詳述 日本史史料集』）2008年 実教出版

[金融（財政）]

- 4 矢銭について…『コミック戦国大名 織田信長の経済学』 同上
- 5 判銭・矢銭について…『織田信長のマネー革命』ソフトバンク新書 2011年 武田知弘

[貿易]

- 6 宣教師と織田信長の関係…『ビジュアル版 逆説の日本史四 信長全史』 同上
- 7 九州のキリシタン大名と貿易…『海外貿易から読む戦国時代』PHP新書 2004年 武光誠
- 8 南蛮貿易の概念図…『新詳日本史』 浜島書店 2006年

[貨幣]

- 9 信長の最大支配領域図…『海外貿易から読む戦国時代』 同上
- 10 畿内周辺の特産品や資源の地図…『日本史のアーカイブ』 2011年 とうほう
- 11 信長による撰銭令の実施…『織豊政権と江戸幕府』 講談社学術文庫 2009年 池上裕子

12 金・銀と銭との交換レート …『織田信長のマネー革命』 同上

「商業」では、楽市楽座令の資料を基に考察し、信長が商品経済を発展させ、座役などの収入源を増やしたことに気づかせる。「金融（財政）」では、商業の中心地の堺に対して信長がどのように課税をしていたのかを理解する。堺への課税は「商業」と抱き合わせで考えることで、様々な課税対象について気づかせるねらいがある。「貿易」では、鉄砲や火薬などの戦略物資や、舶来品の動物やマント等の威信財を、信長がどのように手に入れたのかを考えさせる。「貨幣」では、円滑な商業圏の育成のために信長が打った貨幣流通政策を考えさせた。複数資料による比較検討を行わせることで、信長の経済力の源や権威の源泉、戦略物資の獲得など多角的な視点を持って織田信長を捉えることが可能になる。

展開② 思考の型の提示

活用問題①の考察にあたり写真1のように、室町時代の経済知識を思考の型として参考にさせた。先行する室町時代に関する知識は既習であり、生徒は室町時代の知識を思考の型として活用し、織田信長はそれをどう利用・変化させていったのかを

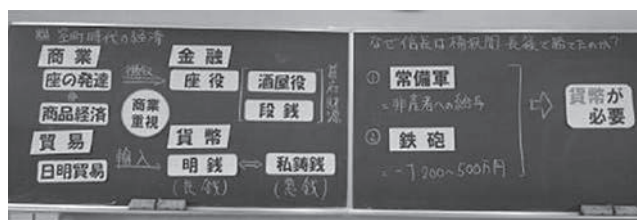


写真1 室町時代の経済的知識を「思考の型」として使う

考えることができる。貿易について言えば、足利義満による日明貿易を提示することが、信長の貿易政策のねらいを考えるための思考の補助線となる。同じことは、商業における座の存在や、貨幣における鉱山の存在などについても言える。

展開③ 表現と検証

資料を提示し、思考の型を提示し、生徒が考察したら、あとは表現活動である。今回、表現活動としては、ミニホワイトボードを使用した発表を行った（ホワイトボードの大きさは1m×80cm程度）。生徒は話し合った内容について、ホワイトボードにまとめ、それを口頭で発表した。

生徒の仮説の発表を受け、授業者が四つの視点から信長の経済政策についての補足説明を行った。仮説の検証は「説明型」授業の展開の最後に位置付けられるものである。小原は、仮説の検証の前に生徒による資料読解を組み込んでいるが、本実践では、授業者が年表などの資料を再提示する形で検証を行った。

(2) 活用問題②の授業展開

展開① 資料の提示

四つの視点の経済政策を考えたのち、生徒に「実は五つ目の経済政策の視点がある」と投げかけた。五つ目の経済政策が何であるかを考えるのが活用問題②である。

生徒に提示した資料は、1. 『信長公記』の一節 2. 瀬田の唐橋の浮世絵 3. 彦根街道の写真 4. 京都と大坂間の関所の数 5. 関所の料金 6. 織田信長の居城の変遷 7. 城下町集住政策を示すエピソードの7つである。出典資料は『信長公記』『さかのぼり日本史⑦ 富を制するものが天下を制す』『ビジュアル版 逆説の日本史四 信長全史』である。

展開② 思考の型の提示

活用問題②では、思考の型を具体的に提示していない。しかし「五つ目の経済政策を考える」という投げかけが、生徒の思考を助ける思考の型として機能している。生徒は、信長の経済政策に関して「五つ目」という言い方をされることで、それまでの考察には無い視点を探ろうとする。このように思考の方向付けを行えば、生徒の考察が広がりすぎず、考える内容の焦点がしぼれる。

展開③ 表現と検証

信長の物流政策について立てた仮説を、各班の代表一名ずつが前に出てきて、写真2のように板書させた。仮説に対しては彦根街道・山中関所跡などの資料を提示し、信長の経済戦略の五つ目が物流であることを検証した。資料読解による仮説立て、新たな資料を使用した仮説の検証の流れは活用問題①と同様である。

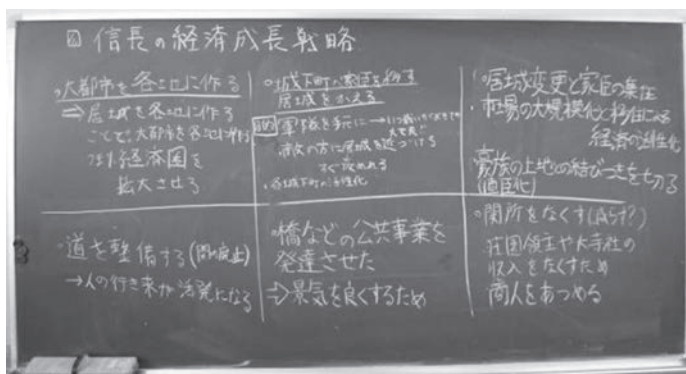


写真2 生徒の板書による信長の五つ目の経済政策の特徴

(3) 活用問題③の授業展開

展開① 資料の提示

信長における物流戦略の重要性を理解させ、更に深く物流について理解するため、畿内周辺の道路地図、全国の海上・陸上流通網の地図、「松」「鉄」「木綿」などの戦略物資に関する説明文、日本全国の産物地図、を資料として生徒に提示した。考察するのは、「小浜」「坂本」「大津」「草津」「大湊」「桑名」「大坂」の7つの都市の戦略的意義である。

展開② 思考の型の提示

考察にあたっては、問題解決のプロセスを見通して思考や表現の段取りを考えさせるために「堺」を例にとって「場所の特徴」「運ばれたモノ」「その場所を抑えることの効果」の三つを「思考の型」として提示した。

図表3 物流拠点の意義を考察するための思考の型

問題 以下に示した地名のうち二つを選び○をつけ、「場所の重要性」「運ばれたモノ」「その場所を抑えることの効果」について考えなさい。

		小浜	坂本	大津	草津	大湊	桑名	大阪
〔地名〕も	場所の重要性							
	運ばれたモノ							
	_____を抑えることの効果							

- ・「場所の特徴」：瀬戸内海交通の最東端、西日本や外国貿易の物資が集まる
- ・「運ばれたモノ」：硝石、年貢、塩、刀、胡麻、木材
- ・「場所を抑える意義」：交通料（津料）の徴収、戦略物資の硝石独占、堺商人の持つ全国情報獲得
生徒は7つの都市のうち2つを選び、図表3のワークシートに取り組む形で仮説を立てた。

展開③ 表現と検証

活用問題③の表現活動は一枚の大きな地図を完成させるというものである。図表3に見た三つの思考の型毎に生徒はカードを作成し、それを地図に貼り付けることで、写真3のような形で信長の物流戦略を可視化させた（写真4は完成した地図）。生徒は貼り付けたカードを基にして、自分たちの仮説について発表を行った。小浜について生徒が立てた仮説は以下のとおり

- ・「場所の特徴」：京都に近い、リアス式海岸のため良港、馬借の所在地、日本海側航路の中間点
- ・「運ばれたモノ」：鉄、和紙、うるし、漆器、魚
- ・「場所を抑える意義」：山陰の鉄を利用（武器や農具）、鉄が取れる山陰地方とのかかわり日本全国や海外（明）との貿易、鉄砲の型を作れる、馬借の情報



写真3 完成前の地図

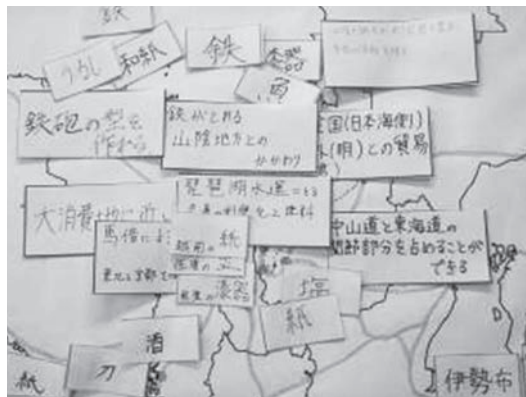


写真4 完成後の地図

仮説に対して検証作業では、『福井県史』から京都近郊の高野関を通過した物資の一覧表を提示した。表には、「くろかね（鉄）」「紙」「かいさう（海草）」「合器（漆器）」など、立てた仮説に対応する物資が記載されている。また、大坂の地理的重要性を確認するために、淀川に関する資料を提示するなど、検証活動を他の要衝に関しても行った。

(4) 活用課題の授業展開

活用問題を考察した上で、まとめの表現活動として活用課題「織田信長の天下統一事業」について400字の小論文を生徒に課した。型の活用は、仮説検証や文章の創作という問題解決的な目標を持つとともに、その過程と成果を論述やレポート、討論やスピーチといった表現形式にまとめ上げていくことまでを含んでいる。そこで、小論文作成にあたり、図表4のような小論文のための表現の型を生徒に提示した。

こうした表現の型によって、生徒の表現力を高め、恣意的な表現方法のバラつきを防ぎ、小論文の質を一定に保つことができる。小論文の展開部分では、資料をもとに考えさせるために（※）に示した条件を示した。こうした型の土台の上で、生徒が自由に考察し個性を発揮してもらう。

小論文をの評価規準として、図表5のようなループリック評価を用いた。松下は学力を小論文や論述などのパフォーマンスのかたちにして見えるようにすることを「可視化」、パフォーマンスからその背後にある学力を推論することを「解釈」と呼んでいる⁷。その「解釈」のためのツールがループリックである。

ループリックはABCDの4つの評価観点から成り、各観点を4段階の規準で評価する構造である。ABCDすべて観点で4がつけば16点満点。評価のつけ方は、16点でS、15～14点でA、13～10点でB、9点以下でCとした。

ループリックのメリットは、目に見えない生徒の多様な能力が評価できることに加え、評価の客観性を保つことが可能なことにある。また、評価規準を小論文の作成前に生徒に示しておくことで、生徒はどのような観点到留意して小論文を書けばよいのか意識化できる。

4つの観点について、本実践は「説明型」の授業であることから【C】の観点を設け、説得力ある説明ができることを評価の対象とした。【D】の資料活用の観点を設けたのは、活用学習のポイント

図表4 生徒に示した小論文における表現の型

内容	割合（目安）	書き方の例
問題提起	10%程度	例：なぜ信長は天下統一事業を進められたのか
展開	70～80%程度	例：○○を信長は重視したからである 例：■■の政策を実施したことからもそれがわかる （※）具体的な事例や写真、地図、グラフ、数値などの資料を根拠として述べること。
考察	10～20%程度	例：以上のような政策を展開した信長は△△な人物だと言える。 例：××こそ天下統一事業のポイントだったと言える。 など

図表5 小論文ループリック（評価規準）

	【A】 論理構成	【B】 習得した知識の活用	【C】 自身の考察	【D】 資料活用
4	論作文全体を通して、「型」を活用するとともに論理的で読み易い文章になっている	授業で習得した知識や用語を、自分の意見を述べるために活用できている	習得した知識をからめて、自身が学んだ事を考察できており、かつ、説得力が高い。	文複数の資料を引用しながら、自分の考えを述べる事ができている。
3	論作文の「型」を文章全体にわたって使っている。	授業で習得した知識や用語を3個以上使っている	習得した知識をからめて、自身が学んだ事が考察できている。	資料を引用しつつ自分の考えを述べる事ができている。
2	論作文の「型」を一回は使っている	授業で習得した知識や用語を1つ使っている	習得した知識に対しての感想を述べるに留まっている。	資料を引用している。
1	論作文の「型」を使用していない	授業で習得した知識や用語を全く使用できていない。	習得した知識に対して全く自分の考察ができていない。	資料を活用できていない。

として、様々な資料を活用した表現が条件になっているからであるが、歴史学者の山本博文が「歴史事象を描き出そうとするときには、関係する資料を探し出し、それを正当に読み解いて『史実』を明らかにし、さらに個々の史実がどのような意味を持つのかを『解釈』し、さらに解釈の集積として、時代像や人物像を『イメージ』します。」⁸と述べているように、歴史的事象を理解するためには、資料読解は切っても切り離せない関係にあるためである。

6. 授業の結果

生徒は、学んだ知識をどのように活用したのだろうか。活用問題①と活用問題②に取り組んだあと、生徒には100文字程度の感想文を書かせた。以下の写真5はその一部である。

生徒A、生徒Bは関所の撤廃や楽市令による信長の自由化政策について、学んだ内容を自分の言葉で表現できている。生徒B、生徒Dは信長の経済力の源を、信長の自由化政策や公共事業に着目して述べられており、信長の天下統一事業について経済的な視点をもって捉えられていることが分かる。生徒C、生徒Dは信長の政策は、現代人も学ぶところが多くあると述べているが、授業内容を現在に結び付けて感想を書いていた生徒は16名中6名いた。授業内容が知識として完結せず、さまざまな文脈で活用できる力として生徒に身についたと言える。

写真6は活用課題として課した400字の小論文である。授業のまとめとして学んだ知識を活用しつつ、なぜ信長の天下統一事業が可能であったのかが述べられている。

生徒Eは資料を活用し、信長が経済基盤を固めるために為替レートの設定権や物流拠点を掌握したことを述べている。文章構成も型に従って読みやすく、評価Sをつけた。生徒Fは地図などの資料を活用しながら、論が展開されているが、「寺社勢力による貿易の独占」など内容の説得力にやや疑問符がつく記述があり、ループリックの観点【C】で3点とし、最終評価は15点のAとした。

全体を採点した結果、73%の生徒が15点以上の評価であった（16点が1名、15点が10名、14点

今までとは違う、新しいことをした信長は非常に優れていたのだと
と実感させられる感じがいて驚きました。室町時代までは、関所
を建てて関税を集めるのやり方が当たり前で、今までは誰も
行っていない関所の廃止を行うのは信長だからこそ出来たことだ
と思います。大坂を恐れ、いくつものイノベーションを行って、天下統一を
手に入れたことを知ることができました。

織田信長が革新的だと思える点、現代でも通用
する政策を行っている点にあると思う。1つとして商業の
自由化がある。既得権益をもつ寺社を弱体化しながら、
市場を活性化し、自分の懐をもうかるように
行った革新性を備えた人物だとは思いました。今日の
授業、最後に刺激的でした！

信長の、新しいことをする能力は非常に
優れたものではあるが、「新しいことを思いつく
というのも才能の一つだ」と思う。信長の政策の
中には、基本的な理論が現代でも通用するものか
あると思うので、現代の政治家もちゃんと歴史
を勉強して、政策に役立てるべき。

信長と言えば戦いの面でも知らなかったが、今日の授業で
商業にも力を入れていくのがよく分かった。信長はいかに人物、
金を流すのがうまい、安土楽座、関所の撤廃、公共事業の推進を
行い多くの財源を確保した。今日にも信長の考えがあった見方でも
うんがいばむと景気がよくないではある、あやばや世の中は
金だとも思った(笑)。

写真5 100文字感想文 [左上が生徒A, 右上が生徒B, 左下が生徒C, 右下が生徒D]

織田信長はなぜ天下統一が可能であったか、経済的観点に留意しつつ、その政策を複数型
連付けながら述べよ。

クラス / 番号 40 名前

尾張の守護代であった織田信長が天下統一
をするほどの強大な力を持つようになったの
には、どのような秘密があるのだろうか。
それは信長に大きな経済力があったことと
関係している。京都周辺の漆を手の内に入れ
全国の物資を集めるとともに大量の建材を得
た。建材をより遠くへへの物流が四方八方より
行われているとわかる。また、漆漆では戦略
物資である硝石を独占することによって強大な軍事
力をも手に入れた。貨幣については500年の丹
波改めのように各地で貨幣の材料である銀や
銅の採れる場所を支配した。その他にも銅銭
金の強化や金一両に対して銅銭一五文等
為替レートを決めた。銅銭貨幣を集めること
で京都をよくした大きな経済力をもつことで戦
うための軍備を整え大いに力をもったとい
うのではないだろうか。
このようなまず経済基盤を確実に固めてい
くことから始めたというのが、信長が天下統一
をする一つのポイントであったと言える。

織田信長はなぜ天下統一が可能であったか、経済的観点に留意しつつ、その政策を複数型
連付けながら述べよ。

クラス 6 番号 24 名前

数多くの大名のなかでなぜ信長が天下統一を
達成できたのか多くの政策が気になるところ
の1因は「寺社勢力との決別」にあるのでは
ないだろうか。それは軍事的には比叡山焼き
討ちや本願寺攻めに表われていた。経済的に
はまず「関所の撤廃」を行ったことがあげられる。
関税は大寺社の収入源となっていたからで、
例として当時は近江瀬田から越前鯖江に行く
だけで4貫2匁もの関税が必要だった。次に
港や街道の要所など流通拠点をあさえたこと
だ。当時の流通拠点は大寺社のお蔵元にあっ
たことが少なくない。例えば琵琶湖の水運で
北国街道と繋がる。この坂本は比叡山のすぐ
そばだ。他にも大坂と本願寺や大津と伊勢神
宮などの位置を地図で確認してもらいたい。
信長は大寺社による貿易利益の独占に手をつ
けたのだ。信長はこれらの政策により、三信玄
や謙信といった号をもらって寺社と妥協した他
の大名と経済的に大きな差をつけることがで
き、天下統一を達成できたのだと思う。

写真6 400文字小論文 [左が生徒E, 右が生徒F]

が2名、13点が2名、1名提出せず）。評価観点毎に見ると、全ての観点で評価4または3が付いており、どの観点でも評価2が付いた生徒はいなかった。なお、【A】論理構成は100%、【B】習得した知識の活用は93%、【C】自身の考察は53%、【D】資料活用は60%の生徒が評価4であった。習得した知識の活用について、ほとんど全ての生徒が小論文の中で行っていたと言えるだろう。

また、授業後、アンケートによって効果測定を行った。質問項目は12個で次の通り。①講座を通じて織田信長への理解が深まった、②織田信長についてもっと知りたいと思う、③戦国時代についてもっと知りたいと思う、④経済的観点を軸に歴史を見ることで歴史の理解を深めることができた、⑤経済的観点から歴史を見ることは面白い、⑥歴史の授業において資料をもとに政策の目的や効果を考えることはよい、⑦自分の意見を集中して書くことができた、⑧ホワイトボードを使って考えをまとめて発表することはよい、⑨班ごとに資料やテーマを変えて調べることはよい、⑩黒板上の大きな地図を完成させる活動はよい、⑪グループワークに興味深く取り組んだ、⑫グループワークでの話し合いをもっとしたい。①～③は、歴史への興味関心を高められたか、④～⑤は、経済的観点を軸に授業を展開することの効果、⑥～⑩は活用学習の授業展開に対する満足度、⑪～⑫はグループワークへの自信への取り組み具合を調べた。評価形式は四件法で4 と思う、3 まあ思う、2 あまりそう思わない、1 思わない、である。

図表6より、①の質問に対しては16名中14名の生徒が4を、残り2名の生徒が3と答え、④の質問に対しては15名の生徒が4を、1名の生徒が3と答えた。

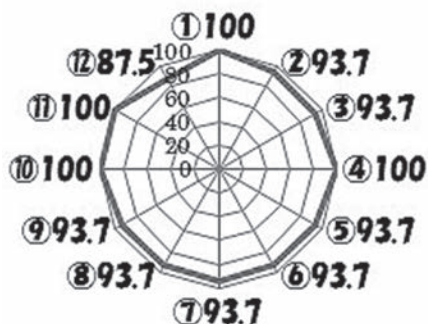
こうした結果から、生徒も経済的観点を切り口に歴史の理解を深めたと感じていたと言える。また、⑥～⑩の活用学習自体に関する評価も総じて高く、知識を活用して考える活用学習に対して、充実感を持って取り組んだことが、グラフから見て取れた。

7 成果と課題

仮説を立てるためには、一定の知識と思考法が必要であり、授業者は習得した知識を活用しやすくする工夫が求められる。安彦忠彦（2008）は知識を活用させる学習について、教科のレベルでは、習得した知識をほかの文脈で、使う機会を設けることが重要であるとしているが、感想文や小論文、アンケート結果から、生徒が習得した知識を活用し、資料を基に思考・判断・表現を行い、その力を育んだことが見て取れた。

今後の課題を二点挙げる。一点目は、授業自体が、有志の生徒を集めた特別講座というべき形をとっている点である。有志の少数集団に対して行った授業が、通常の授業クラスにおいても同様の受

図表6 アンケート結果
(評価4・3を合わせた合計の割合)



け入れられ方をするかどうかは未知数である。通常の授業においては、活用学習の前に信長に対する興味関心を持たせる工夫が必要かもしれない。

二点目は、表現活動に対する生徒同士の意見交換の場や、生徒同士の相互評価をする場を作ることができなかったことである。田中（2011）の提唱する活用学習は「活用の成果を評価する力」というメタ認知的な力の育成まで求めるものである。この点について本実践では扱うことができなかった。

活用学習は一言で言えば、「教師による生徒の思考活動のデザイン」である。デザインというと、教師が望む形の思考に生徒を誘導するような印象を受けるかもしれない。しかしそれは、多様な生徒が個性的な思考や表現をするための舞台を整えるという意味である。教師が整えた舞台の上で、生徒には個性的に思考し楽しく表現活動を行う。そのような活用学習の実践を今後とも重ねていきたい。

【注】

- 1 小原友行・児玉康弘 編著「思考力・判断力・表現力をつける中学歴史授業モデル」明治図書、2011年、pp. 6-13。
- 2 田中博之 編著「言葉の力を育てる活用学習 型を活用し個性的に表現する子どもたち」ミネルヴァ書房、2011年、pp. 17-19。
- 3 田中、前掲書、p. 15。
- 4 西岡加名恵・田中耕治 編著「「活用する力」を育てる授業と評価 パフォーマンス課題とルーブリックの提案」学事出版、2009年、p. 12。
- 5 池上裕子「織田信長」吉川弘文館、2012年、pp. 233-234。
- 6 脇田修「織田信長 中世最後の覇者」中公新書、1987年、p. 107。
- 7 松下佳代「パフォーマンス評価」日本標準ブックレット、2007年、pp. 9-10。
- 8 山本博文「歴史をつかむ技法」新潮文庫、2013年、p. 45。

【参考文献】

- 安彦忠彦（2008）「「活用力」を育てる授業の考え方と実践—新学習指導要領対応」 図書文化社
- 池上裕子（2012）「織田信長」 吉川弘文館
- 木原俊行（2011）「活用型学力を育てる授業づくり—思考・判断・表現力を高めるための指導と評価の工夫（シリーズ・21世紀型学力を育てる学びの創造）」 ミネルヴァ書房
- 松下佳代（2007）「パフォーマンス評価」 日本標準ブックレット
- 西岡加名恵・田中耕治 編著（2009）「「活用する力」を育てる授業と評価 パフォーマンス課題とルーブリックの提案」 学事出版
- 中尾敏朗（2013）「中等教育資料 06月号」
- 小原友行・児玉康弘 編著（2011）「思考力・判断力・表現力をつける中学歴史授業モデル」 明治図書
- 小原友行（2014）「高等学校社会系教科における批判的思考力を育成する授業開発の研究（Ⅲ）：公民科現代社会 小単元「日銀の金融政策」の場合」 広島大学学部・附属学校共同研究紀要
- 小和田哲男（2012）「さかのぼり日本史⑦ 富を制するものが天下を制す」 NHK出版
- 田中博之 編著（2011）「言葉の力を育てる活用学習 型を活用し個性的に表現する子どもたち」 ミネルヴァ書房
- 田中博之（2013）「カリキュラム編成論 —子どもの総合学力を育てる学校づくり—」 NHK出版
- 山本博文（2013）「歴史をつかむ技法」 新潮文庫
- 脇田修（1987）「織田信長 中世最後の覇者」 中公新書

渡辺研悟 2013「多様な資料を活用して、時事問題を考察し表現する授業の創造」 早稲田大学大学院教職研究科
紀要第5号 pp.45～64.

愛知県総合教育センター研究紀要（2006）「第96集」

文部科学省（2010）「中等教育資料07月号」

文部科学省（2011）「中等教育資料07月号」

文部科学省（2012）「中等教育資料06月号」

文部科学省（2013）「中等教育資料06月号」

文部科学省（2014）「中等教育資料06月号」